

2025 年度入学試験問題

2024 年 10 月 27 日実施

試験時間 10:30～12:00

1. 試験監督者の指示があるまで、問題用紙や筆記用具に触れてはいけません。触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。
2. 試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は、黒芯の鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（電動式・大型のもの・ハンドル付きのものは不可）とし、それ以外の使用は認めません。
3. 携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ICレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。
4. 試験開始の合図により、試験を始めてください。
5. 解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
6. 試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置くこと。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立ってはいけません。
7. 問題用紙と解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

[illegible]

問題

下記のテキストにおいて、著者は「もし子供を創造力にあふれ、息の詰まったファンタジア（多くの大人たちのような）ではなく、のびのびとしたファンタジアに恵まれた人間に育てたいなら、可能なかぎり多くのデータを子供に記憶させるべきだ」と述べている。

(1) 著者がなぜそのように考えているかを述べなさい。

(2) この考えにあなたは賛成ですか、あるいは反対ですか。

その理由もあわせて論じなさい。

【設問(1)(2)ともに字数制限なし】

ファンタジアの産物は、想像力、発明のそれと同様、考えたことと知っているものと関係から生まれる（どんな種類の関係かは後々みる）。当然ながら知らないものと知らないものとは関係を築くことはできないし、知っているものと知らないものとも関係は築けない。例えばガラス板と pfzws では関係を築くことはできない。しかし、ガラス板とゴムシートならどうだろう、これなら関係を築くことができるのではないだろうか。もちろんこれは、その人がガラスもゴムも知っているとは仮定しての話だが。この関係からどんなものが連想できるだろうか。しなやかなガラス、あるいはスケルトンのゴムなんかを思いつくかもしれない。現実にはゴムのように伸び縮みするガラスはないだろうから、これこそがファンタジア的思考となる。これをうけて、想像力が始動する。さあ、わたしにはだんだんしなやかなガラスが視えてくる……引っ張ったらどうなる？何も起きない。澄み切った水のような層をしているのだろうか？ 想像力はイメージし、視ようとし始める。創造力は適切な使い方について考え、発明は製造するための化学式を考える。

つまり、ファンタジアの豊かさは、その人の築いた関係に比例する。その人がきわめて限定的な文化の中にいるなら、壮大なファンタジアはもてず、いまある手段、すでに知っている手段を常に利用せざるをえない。知っていることが少なくても、毛ではなく葉に覆われた羊を想像できるかもしれない。これは、喩えるという観点からすればかなりのものである。しかし、他のものと別の関係を築くことを続けていくとなると、ある地点で行きどまらざるをえないだろう。

子供は壮大なファンタジアの持ち主だと多くの人が信じている。なぜなら、現実的でないものを子供のイタズラ書きや話す内容から感じ取るからだ。あるいは、大人は、自分がずいぶん条件づけられて行き場のない状態にあるから、もう子供と同じようには発想できないと感じ、子供の壮大なファンタジアを信じ込んでいるのかもしれない。しかし実際には、子供もきわめて単純な操作をしているに過ぎない。つまり、子供はよく知らないものに知っているものを投影しているのだ。食べる、泣く、眠る、母さんと話す、

うんちをする、歩く、そして眠る、これが子供のすること。世界を知らない子供にとってはどんなことも自分と同等となる。例えば、大きなボールは小さなボールのお母さん。ボールが汚いな、今うんちをしたんだね。ボールは寒いかな、ぼくは寒いよ……とこんなふうに。これはファンタジアではなく、自分の知っている世界の投影でしかない。

もし子供を創造力にあふれ、息の詰まったファンタジア（多くの大人たちのような）ではなく、のびのびとしたファンタジアに恵まれた人間に育てたいなら、可能なかぎり多くのデータを子供に記憶させるべきだ。記憶したデータが多ければその分より多くの関係を築くことができ、問題につきあたってもそのデータをもとに毎回解決を導きだすことができる。

サルもファンタジアの操作をしている。例えば非常に高い場所にバナナが置いてあるとする。サルはバナナにたどり着かねばならない。さてどうするか。そこには木箱がある。以前遊んだことのある木箱だ。そこで高さの関係を築く。木箱の高さと自分の身長（バナナには手が届かないと理解している）を合計する。木箱にのり、ジャンプ。そしてバナナ獲得。ファンタジアのない人間だったら、餓死していたかもしれない。

（出典）

ブルーノ・ムナリー著／萱野有美訳 『ファンタジア』 みすず書房 2006 年 pp.29-30

(FANTASIA by Bruno Munari. Reproduced with permission of Laterza.)